

セッション六

家庭の哲学的基礎の理解ーヘーゲルと統一思想の比較

デイトトリツヒ・サイデル

一 序論

今日は、家庭制度が、伝統的な道德や倫理的価値観が相対化されつつある過程に直面している時であり、家庭という問題、単に身近な人間関係という枠内のみでなく、その究極的な性質や運命に関する問題としても理解する必要性が生じている。基本的な家庭規範の侵害から家庭をいかに守るかという牧会的な任務も、人々がそのような道德規範の存在論的根拠を知ることによってのみ、効果的に果たすことができる。かくして、家庭に関して哲学のおよび神学的に考察することが、家庭関係をいやし改善するという我々の共通の任務に成功するために必要な一步となるのである。

本論文の目的は、家庭という組織を定義する根本原理を論じるため、二つの有神論的な哲学的アプローチを検討し評価することである。まず、ヘーゲルの家庭に関する弁証法哲学に焦点をあてて分析を開始する。(1)本論文では、ヘーゲルの著作の内の二つ、すなわち「精神現象学」(2)と「法哲学」(3)のみに限って分析する。「精神現象学」は一八〇六年に書かれ、ヘーゲルの最初の出版された著作となったのに対し、「法哲学」はその後、ヘーゲルが当時の傑出した哲学者としての名声を確立した後の一八二一年に書かれている。それ故、これら二つの著作はヘーゲルの思想発展の約十五年間をカバーしており、家庭に関する彼の哲学的理解を十分に現しているように思われる。

第二番目の有神論的な哲学的アプローチとは、過去約二十年間にわたって李相憲先生が発展させてきた統一思想の家庭観の立場を検討するものである。統一思想は、文鮮明師が受けた包括的な啓示に基づく教義体系である統一神学を発展的に哲学的に説明したものと見ることができ。本論文の研究のために、我々は主として統一思

想研究院から出版された二つの資料、すなわち、「Explaining Unification Thought」「統一思想解説」と「Fundamentals of Unification Thought」「統一思想概要」を用いることにする。二つとも統一思想の家庭観の意味するところを十分に取り扱っているように思われる。

ヘーゲルの哲学体系の複雑さと統一思想における哲学的諸概要の新しさに鑑み、本論文の最初の章を哲学的基礎と基本的な方法的考察にあてる必要がある。両者の哲学的アプローチの輪郭を示した後で、さらにヘーゲルと統一思想による家庭の定義の分析へと進む。本論文における比較分析の結論では、ヘーゲルの家庭観がいくつかの重要な点で統一思想の立場とどのように一致しているかを示そうとするが、他方において本質的な不一致点もあり、それらは家庭の哲学的基礎に関する現代の論議における統一思想の重要な新しい点であると見ることができる。

二 基礎的概念と哲学的方法

ヘーゲルと統一思想における家庭の定義を検討する前に、二つのアプローチの中で用いられている哲学概念と特定の方法論を分析することにする。それに関しては次の三点について述べる。第一に、「精神現象学」と「法哲学」の中で示されている倫理的本質についてのヘーゲルの見方の前提となっているものを論じる。第二に、統一倫理論の本質的前提について、主として「統一思想解説」を参考にしながら概要を述べる。最後に、それら二つの哲学的アプローチに関して、それらの継続性と非継続性の点から簡単に評価することにする。

(二) 倫理の分野に関するヘーゲルの見方の諸前提

(1) 精神の発展

専門家でない読者にとっては、倫理の本質としての精神の現われというヘーゲル哲学の概念を理解するためには、まず最初に現実と真理というような基礎的概念を学ばずしては、「現象学」に述べられているようなヘーゲルの家庭観を把握することは困難かも知れない。「現象学」の中で、ヘーゲルは精神の発展を、意識、自己意識、および理性などのような、発展の過程の特徴的な契機を分析することによって述べている。精神における理性の現われを示すに際して、ヘーゲルは現実性と真理性という二つのカテゴリーが第一に重要であると次のように主張する。

精神の持つこの理性が、精神によって存在する理性として、または精神の中において現実的であり、その世界であるところの理性として直感されるとき、精神はその真理の中に存在する。現実的な存在を持つのは、精神すなわち倫理的本質である。(6)……生きている倫理的社会は、その真理の中の倫理的本質である。(7)

この文章によれば、ヘーゲルは精神を、現実におけるその機能と共に、その最も発展した抽象概念である理性またはロゴスを包含するものとして理解している。理性に基づいて行動しなければならないということが、精神が存在するための一つの存在論的前提である。のみならず、ヘーゲルは、この精神という存在は初めから設計された秩序に照応し、真理の基準を満たしているものと見ている。精神は行動によって特徴づけられている、とヘーゲルは言う。それ故、ヘーゲルによれば、倫理的秩序およびそれによって家庭を取り扱うことが、真理もし

くは絶対精神の現われになるというのである。

家庭を定義しようとする前に、ヘーゲルは精神の二つのさらなる現われである共同体と国家について述べている。共同体と国家についてのヘーゲルの説明は、精神自体が個別性と普遍性という存在論的カテゴリーを包含し統一するという彼の主張に基づいている。ヘーゲルは次のように述べている。

倫理の実体は現実の実体であり、存在する意義の複数の中で実現される絶対精神（普遍的本質）である。この精神が共同体であり、それはそれ自体の中に（個人を）保持するということにおいて、暗黙のうちに精神もしくは実体である。現実の実体としてはそれは国家であり、現実の意識としてはそれはその国家の市民である。(8)

「現象学」から引用したこの文章は二つの論点を示しており、それらについてさらに説明が必要である。第一に、ヘーゲルは実体という用語を「個性化された現実」に対していると見られる「普遍的本質および目的」として理解している。ヘーゲルにとっては、先に述べた精神内の倫理的行為が精神を普遍的本質と個別化された現実という実体の二つ契機へと分裂させていることに対して責任がある。ヘーゲルの思考においては、精神が契機ないし抽象へと分裂する要素を含んでいるのみでなく、もっと重要なこととして、精神は対立するカテゴリーの間の活発な仲裁を意味するのである。言い換えれば、精神のユニークな特質は、対立する諸契機を総合された全体の中で均衡したままに保持するその能力から成っている。ヘーゲルは、普遍的本質とその個別化された表現との間を統一するものが自己意識であると理解している。ということは、自己意識は、個別性を絶対精神または普遍的本

質と一つになる点まで引き上げることによって、倫理的行為を率先させるのである。真理によって限定される行為としての倫理的行為は、かくして絶対精神への個人の参与によって定義されるとヘーゲルは言うのである。第二の論点は、個人へ向かう絶対精神の運動に関するものである。ヘーゲルによれば、倫理的行為がない限り、普遍的本質と目的は思考の中でのみ存在するにすぎない。しかしながら、自己意識の仲裁は倫理的本質の担い手であるが故に、普遍的本質としての実体が現実の存在へと移行する存在論的出来事が起こる。言い換えれば、ヘーゲルにとっては、現実性のカテゴリーは、倫理的に巻き込まれた自己意識の現実を意味するのみでなく、目的実現、すなわち個人の集団としての共同体または国家の中に現実化された絶対精神をも構成する。かくして、ヘーゲルの共同体と国家の概念は、現実性と絶対性の両者が絶対精神の目的論的な成就を意味する現実の実体という観念に基づいているのである。

このように、ヘーゲルは、真理に満ちた行為として現実化するに際して、倫理的本質である理性またはロゴスとして絶対精神を理解することを第一義的に優先している。これはすなわち、絶対精神は思考と現実を統一しており、かくして理性的および現実的の両方として現われる、ということの意味するのである。しかしながら、真理を決定するためには、我々は各存在と絶対との現実の関係を見いださなければならぬ。(11)ヘーゲルによれば、真理を決定するような過程は、弁証法的方法を適用することによってのみ推進することができるというのである。

(2) 弁証法的方法

ヘーゲルの哲学体系、特にその家庭観を理解するためには、彼の弁証法的方法の基礎的内容を想起することが不可欠であるように思われる。家庭関係を分析するという我々の目的のためには、ヘーゲルの弁証法を「法哲学」

に従って論じるのが適當である。

精神の發展を述べるに際して、ヘーゲルは存在もしくは、存在するという用語を、その弁証法のパターンに従って、即自存在(existence-in-itself)、対自存在(existence-for-itself)、即自対自存在(existence-in-and-for-itself)という三つの意味で用いている。即自存在とは、すべての特性が含蓄的、潜伏的もしくは未開発の状態にある發展の初期の段階を表わす。それは可能性の段階であって、單純存在(einfaches Dasein)ともいわれ、ここでは周囲のものとの死活的に重要な関係はまだ確立されていない。しかし対自存在の方は、發展のその後の対照的な段階を意味し、そこでは單純存在のもともとの核が明白かつ現実的なものとなる。このレベルにおいて不確定要素は克服され、可能から現実性への最初の運動が成される。最後に、即自対自存在とは、前の二つの段階がより上の統合された全体へと総合される發展の統一的な段階のことである。マクブライド・ステレット(Macbride Sterrett)の言葉によれば、それは「隠れていた普遍性が完全に特定され」、「個別性が十分に普遍化されるようになって」いる」段階である。(12)

ヘーゲルの弁証法的方法は、上述した三つの存在様相の中に表わされている。「法哲学」を参照すると、即自存在は、客観的な周囲によって影響されたり形づくられたりする潜在可能性を持った主観的精神または個別的自己意識によって取って代わられることができる。ヘーゲル学者のハワード・カインツ(Howard Kainz)によれば、対自存在として知覚されるこの客観的環境は、人間が従わねばならない普遍的、客観的規範ないし義務とさらに同一化される。言い換えれば、ヘーゲルが「道德」というサブ・タイトルの下で述べているこれらの客観的規範は、主観的精神の最も明白な特質、すなわち自由の行使に対して反対の立場に立っている。ヘーゲルによれば、主観的自由と道德法則との間のこの基本的な緊張が、一属の發展のための弁証法的根拠を構成する。その結果の段階は

即自対自存在として理解されているが、前の正反対の存在様相を和解させる。最後に、「法哲学」の中でヘーゲルが示そうとした目的は、即自対自存在は家庭、共同体、国家のような連続した諸レベルを構成するということなのである。

ヘーゲルの弁証法に関する上述の説明においては、正・反・合というしばしば用いられる月並みな用語は避けられている。ウォルター・カウフマン(Walter Kaufmann)がその著書「ヘーゲルの再解釈」の中で指摘しているように、正反合という用語を導入したのは、カントとフィヒテであった。(14)後に、シェリングが引き続いてこれらの用語を用いたが、ヘーゲルは用いなかった。それどころか、ヘーゲルは、しばしば彼に帰せられている三段階の弁証法という機械的な形式主義を、明白に排斥している。ある時点では、ヘーゲルはカントが「どこでも正反合を置いた」としてカントを非難している。(15)カウフマンによれば、むしろ、ヘーゲルの弁証法は、未定着の見解や態度の一貫した追求ということより十分に理解されるのであり、このアプローチを真剣に受け入れてその限界まで押し通すならば、他の見解や態度に変化が起ころであろうというのである。(16)言い換えれば、ヘーゲルの弁証法は対立による発展ということを強調する説明上の工夫であると見なければならぬ。カウフマンが言うように、この発展の原動力は、「全く意図がなかった結果を生み出す人間の情感と突然の逆転の皮肉」(17)である。

これまで、「法哲学」の中で示されているヘーゲルの弁証法を論じてきた。ヘーゲルは、その弁証法を倫理の分野に適用するに際して、人間の道徳上の闘争は自由を行使しようとする人間の固有の性向と道徳の諸法則との間の弁証法的対決に基づいていることを認識している。ヘーゲルの弁証法が家庭にさらにどうのように適用されているかを分析する前に、ヘーゲルの家庭観と統一思想による家庭に関する教説を意味深く評価するための根拠を準備するため、統一倫理論の基本的前提についてその概略を述べてみよう。

(二) 統一厘理論の諸前提

統一思想の中の適切な哲学的論点を提示するために、我々は今や、ヘーゲルが倫理の分野をどのように理解したかに関して発見したことを用いることができる立場にいる。すなわち、ヘーゲルの哲学における基礎的概念に關して調べたことによって、統一思想の中で提示されているいくつかの哲学的立場のユニークな面に照明をあてる機会が与えられたわけである。特に統一厘理論にとって必須であるように見える二つの点がある。第一の論点として、統一思想における目的を中心とした哲学的アプローチの意義を探ることにする。第二の論点は発展の概念に關してであり、この中には第一義的には同一性と変化の問題を扱う方法論の論点が含まれる。ここでは三つの形而上学的原理を論じることによって、統一思想の発展の概念を簡単に分析することにする。のみならず、これらの諸原理の適用は、ロゴスの概念の説明においても見いだすことができるのであり、その説明は、理性に關する統一思想の理解を例示するであろう。

(1) 目的の中心性

統一思想は、創造された実在の目的が神の中心的な性質としての神の心情に基づいていることを強調する。(18) 創造が神の心情の願望から発したということ肯定することによって、そのような最初の動機を成就するという特定の目的が被造物に与えられることになる。統一思想によれば、心情とは「愛を通して喜ぼうとする情的衝動」と定義される。このように、神の創造の動機は、愛を通して喜びを実現したいという願望に根ざしているというのである。

明らかに統一思想は、心情、情、愛、喜びというような概念を、神の生活へ自由に応用している。人間が体験する諸概念を神に帰することを哲学的に正当化することは、神について語る時には、類推的に神を擬人化するこ

とが許されるという仮定に基づいている。言い換えれば、人間が神の似姿として創造されている（創世紀一／二七）ことを一たび認めれば、神は人間の理想化された経験から引き出されたイメージであると語ることができ。しかし、心情や愛、あわれみのような概念的な内容についての類推的な神の擬人化のみが、神に関する我々の知識に貢献する資格があるのである。(19)

類推的な神の擬人化を用いることを前提として、統一思想は、神の属性について原相という概念で説明する。要するに、原相論は、人間の経験に由来する概念上の理想的な類型を通して神に言及しているのである。原相を展開するためのそのような哲学的アプローチをもって、我々は今や神の心情、愛、喜びを通して表現されるような目的の中心性についてさらに論じることができる。

我々の人間的な経験によれば、愛と喜びは主体と対象という両極の位置の間の相互作用を必要とする情的力であることを我々は肯定する。すなわち、心情の目的を中心として、主体と対象の位置で互いに関係する人々の間に授受作用があるならば、愛と喜びの情感が生み出されるのである。特に統一思想は、いかにして心情が愛の出現のための究極的な根拠となるかを次のように説明している。

愛は主体と対象を結ぶ情的な力である。心情の衝動を動機として、情的な力が主体から対象に向かって（あるいは対象から主体に向かって）流れてゆく。そのときの情的な力がすなわち愛である。したがって、心情は愛の源泉であり、愛の出発点である。

この文章には二つの論点が述べられている。第一に、神の心情は、原相における主体と対象という根本的な両

極性の中での授受作用に基づいた情的な力として存在する。統一思想においては、この両極性は性相と形状という神の二性性相として説明されている。(21)性質と形というこれらの二つの本質は、人間の心と体を通して最高に表わされ、それらは主体と対象と同一視できる位置からお互いに関係する。(22)特に、原相内においては、心情が性相の核を占めており、そのことが神の性質の最も内奥の本質を定めている。さらに、統一思想によれば、原相の性相と形状の側面は、常に陽性と陰性というもう一組の両極性を通して、被造世界の中に現われる。(23)これら陽性と陰性の二つの性質は、物理におけるプラス・マイナスの基本的な区別から、生物における男性と女性の最も発達した形に至るまで、すべての被造物の明確な属性として理解することができる。それ故、原相の現実性、もしくは被造物の中での原相の実現とは、明確な陽性と陰性を持った被造世界における性相と形状の現われを意味する。このことは、人間においては、その心と体は男性性相と女性性相の具体的な表現として存在することができるだけであることを意味する。かくして、原相の性相と形状、陽性と陰性、最高の実現は男と女の創造において見いだされるのである。

上記の引用文の第二の論点は、心情が愛の実現のための動機または原動力となっているということである。動機的な力としての心情は、愛の源泉となる。心情と愛は、主体と対象の間の授受作用として明らかにされている。同じ形而上学的原理の土台の上に存在する。ここにおいて、愛は、心情の延長もしくは自己伝達であって、喜びを求める動機的な力に基づいていると見ることが出来る。(4)これは、統一思想では、愛によって成就されるとされる目的や方向性に最高の重要性を認めていることを意味する。ここから倫理の領域は心情を中心とした愛の行動によって規定されるということになる。かくして、一つの現象としての愛を研究するだけでは十分ではなく、愛の真の目的を倫理的行為の土台とすることによってのみ、愛の誤用から生じる諸問題を解決することができる。

あろう。統一思想は神の心情を通して明らかにされるような目的の中心性を創造された実在のすべてに帰して見ることを見てきた。特に、神の心情は、愛を通して喜びを実現するための動機を与える。それ故、すべての被造物は、神の心情によって規定されるような愛の実現に奉仕するという彼らの固有の目的の中にその存在理由を見いだすのである。要するに統一思想は、被造物の発展の目的を説明するのに役立つものとして、かつ神の創造理想と一致する倫理的行為とは何かを定義する基本的な哲学原理として、心情動機説を主張するのである。(25)

(2) 発展の概念

① 三つの形而上学的原理

秩序を通して神の愛が実現するということを統一思想はどのように説明するのかという疑問が残る。何ゆえ人間の家庭は、他の被造物よりもより完全に神の愛を現わすのであろうか。ここで、発展の概念を探求することが必要となる。

神の心情に関して論じたことから分かるように、すべての創造された存在は、愛を通して喜びを実現しようとする情的衝動の結果である。これは、神の心情の力は、創造された実在を通して神の愛を伝達する過程の出发点となるということの意味する。リチャードソン(Richardson)によれば、統一思想は、神の愛が秩序を通して展開するその過程を説明する三つの形而上学的原理を提唱している。(26)これら三つの形而上学的結論は、原相の構造を説明するもので、授受作用の原理、四位基台の原理、正分合作用の原理である。これら三つの原理は、例外なくすべての存在者にあてはまるものであるので、絶対的に普遍的かつ根本的である。

上述したように、原相内には、心情または目的を中心とした主体と対象の授受作用がある。神の心情の性質は、原相内の絶対的に調和的な授受作用を保証し、かくして中和体または合性体を形成する。このことは、心情もし

くは目的に基づく授受作用は本来の目的の成就を推進するという点で一定の結果へ導く、という一般的原则を認する。(27)

神の諸属性の相互作用を明らかにするために、統一思想は、四位基台という空間的類推と正分合作用という時間的類推を導入する。すなわち、原相内に、心情、性相、形状、中和体という四つの空間的な区分または位置を区別することができる。(28)さらに三つの時間的な区分、すなわち第一に「正」としての心情、次に「分」としての性相と形状、最後に「合」としての中和体を区別することができる。(29)

被造世界の發展的側面を分析するためには、統一思想が四位基台と正分合作用を二つの明確な存在様相、すなわち同一性と發展性の様相として適用しているということを指摘することが重要である。まず第一に、これらの存在様相を原相について考察してみよう。一方では、もし心情が性相と形状の間の授受作用における中心の位置を取れば、その結果として中和体または合性体が生じ、これによって自同的四位基台を形成する。このように原相の正体は、心情の絶対性かつ不変性であることが明確にされる。他方、もし心情の動機に根ざした目的が性相と形状の授受作用の中心となれば、その結果は新しいもの、すなわち新生体である。(30)ロゴスまたは現実の創造の過程に反映されているような原相の發展的側面は、それ故、目的、性相、形状、新生体(繁殖体)による發展的四位基台を通して現わされる。

しかしながら、被造世界の場合には、それらの自同性および發展性を決定するのは常に目的である。(31)言い換えれば、被造物は、創造されたというこの故に、例外なく神の心情の願望の成就に奉仕するという固有の目的を持っている。それ故、被造物は、それらの本来の目的を実現するために、自同的四位基台と發展的四位基台を形成するのである。さらに、統一思想は、自同的四位基台と發展的四位基台の両方の概念を、主体(性相)と対象

(形状) という明確な位置の間の授受作用に基づいた形成過程の表現と考えていることに注目するのも重要であるように思われる。

では、これらの構造上の形而上学的説明は、原相の諸活動、特に神の愛の資格ある対象となるという点での人間と家庭の発展にとって、どのように適用されるであろうか。この質問に答えるために、創造過程の最初の必要な一歩として現われるロゴスの概念を論じることしよう。

② ロゴスの概念

統一思想において、ロゴスは、神の思考すなわち構想を存在せしめるための原相内における包括的な計画の概念的な形成を明確にする。(32)思考ないし心的活動は、内的かつ原因的であるので、原相の性相の中にある。しかし上述したように、形成活動が行われるためには、三つの形而上学的原理を適用する必要がある。すなわち原相の性相の中で、ロゴスの形成を許すような四位基台が現われなければならない。統一思想によれば、原相の性相内におけるこのような形成活動を伴う内的四位基台は、創造目的を中心とした内的性相と内的形状との間の授受作用であると定義される。(33)より正確に言えば、先に述べた定義に従って、ロゴスとは、内的発展的四位基台であると説明される。何故なら、形成を中心とした目的の故に、ロゴスは創造のための神の構想であり青写真であると理解されるところの結果的な新生体(繁殖体)であることを明らかにすることができるからである。では、機能的要素である内的性相および形の要素である内的形状という諸概念との関係において、ロゴスはどのように定義されるのであろうか。統一思想は、内的性相は知情意の精神的または機能的特質を持つとし、ロゴスはその特定の現われとしての理性を伴った知の機能を持つとしている。(34)さらに、内的形状は観念、概念、原則数理などのさまざまな心的形態であると見られている。ロゴスを内的形状の面から説明するに際して、統一思想はロゴスを法

則と関連させる。かくして、ロゴスの概念は、目的を中心とした理性と法則との相互作用という観点から理解される。ロゴスが創造の実現のための最初の発展的段階を画するにつれて、第二段階として、神はその本来の概念的青写真の具体的な展開を達成する。(35)明らかに、その第二段階は外的発展的四位基台と定義される一層の発展的活動を説明する。すなわち、原相の性相の位置にある内的発展的四位基台としてのロゴスは、前エネルギーと呼ばれる原相の外的形態たる形状と目的を中心とした授受作用を行う。(36)要するに、目的、ロゴス、前エネルギー、繁殖体から成る外的四位基台を形成することによって、創造過程はその最後の段階に入る。ロゴスによって概念的に現わされた創造理想は、神の愛の具体的な対象を存在せしめることによって現実化される。前に述べたように、そのような資格のある神の愛の対象は、人間であり、特に人間の家庭なのである。

これまで我々は、三つの形而上学的原理とロゴスの概念に焦点をあてて、統一思想における発展の概念を分析してきた。発展を説明するための概念的機構が一貫して本来の創造目的に関係していることが明らかとなった。そのような目的を中心としたアプローチは、実在の不変的側面を説明するための発展的カテゴリーの使用を許すように思われる。すなわち、三つの形而上学的原理は、変化や発展の現象を説明するためのみでなく、自己同一性の性質を理解するためにも普遍的な妥当性を肯定する。統一思想におけるこうした哲学的土台の独自性は、ヘーゲルの立場と簡単に比較することによってさらに例証することができる。

(三) まとめ

家庭の哲学的土台に関するこの研究は、ヘーゲルと統一思想を比較分析することによってまとめることができる。二つの思想体系における家庭の議論を準備するという目的のためには、三つの一般的論点に焦点を当てれば

十分であろう。先に示された哲学的土台の中から、我々は、主な前提または哲学体系の出発点、基礎的哲学的方法、本来の前提の目標または実現、を識別することができる。

(1) 主な前提または哲学体系の出発点

我々は、ヘーゲルが精神の発展は意識、自己意識および理性のような明確な契機を通して成されることを前提としているのを見てきた。精神がこれらの契機または抽象の中に現われるとき、それはまた、個別性と普遍性のような対立物の間を活発に仲介する特質をも持っている。こうした基本的な仮定を例示するために、ヘーゲルは普遍的本質と個別化された表現が精神の統合的機能によって均衡する時自己意識が出現すると述べている。それ故、個体における自己意識は主観的精神の現われであり、他方、共同体における自己意識の一層の発展は客観的精神を通して現わされる。最後に、無数の個体における理性ないし普遍的本質の実現が、絶対精神の目的論的成就を表わす理性国家となる。

こうした基礎的な前提のすべてにおいて、ヘーゲルは理性またはロゴスの第一義性に言及しているが、この立場は、統一思想の心情動機説の概念とは異なっている。すなわち、統一思想の原相は、ヘーゲルの絶対精神の概念と比較しうるものであるが、神の心情が一層の哲学的探求の出発点であるとし、神の個人的かつ関係的な性質を強調する。この統一思想の立場とは对象的に、ヘーゲルは、理性の実現という点から絶対精神について述べており、神を非人格的かつ個別的に理解することを主張している。ヘーゲルは自己意識が理性の実現のための主導的カテゴリーと見ているのに対し、統一思想の心情動機説の概念は、対象意識の中心性を意味している。(37)その理由は、創造された実在のすべては、究極的主体の位置を占める神に対して対象の位置に存在するものと理解されているからである。

(2) 基礎的、哲學的方法

ヘーゲルの弁証法と統一思想の三つの形而上学的原理を比較すると、ヘーゲルの即自存在、対自存在、即自対自存在の概念と、統一思想の正分合作用の概念との間には、継続した照応性があることを肯定することができる。しかしながら、これら二つの思想体系には、大きな相違が現われる。一方において、ヘーゲルは、即自存在が対自存在である周囲とは反対の關係に立つ隠れた潜在的な段階であると見ている。言い換えれば、ヘーゲルの弁証法における最初の二つの段階は、互いに対立する位置から相互に作用し、対立や否定を通して発展を推進する。弁証法的過程の固有の矛盾が解決するのは、第三番目の統合的な即自対自存在の段階においてのみである。その時、先の二つの段階は、より優れた統合された全体に合併されるというのである。

これに対して、統一思想は、発展の過程はそれに先立つ源または目的である「正」によって完全に貫かれていると見る。その次の「分」の段階、すなわち性相と形状の間の活動は、主体と対象といういかなる矛盾的な緊張もない相対的要素間の授受作用であると理解している。すなわち、性相と形状の概念および陽性と陰性の概念は、相互に補完的、調和的に関係する。最後の「合」の段階は、新しい創造による新主体（繁殖体）を含むが、これはヘーゲルの即自対自存在と比較することができる。明らかに、ヘーゲルの弁証法においては目的が欠落しており、そのことが弁証法的発展過程における矛盾や否定の力を肯定することの原因となっていると見ることができ

(3) 本来の前提の目標または実現

これまで論じてきたことから、我々は、発展的過程の目標が倫理の領域の確立であることを明らかにすることができ、ヘーゲルが自己意識の現実性を倫理的活動へのかかわりに依存せしめるとき、彼は個別性の觀念の中

に倫理の領域を置いておられるように思われる。ここでは、価値的行為は個々に対する絶対精神の運動によって定義される。すなわち、普遍の本質としての絶対精神は、真理によって制限された行動に従事する現実の自己意識の中に、その個別化された表現を見いだす。かくして、ヘーゲルにとっては、自己意識の現実性が主観的精神の实在を示し、それが倫理の本質の担い手となるのである。

統一思想は、真理に基づく行動を通して倫理の領域を明確にしようとする点では、ヘーゲルに同意する。しかしヘーゲルは真理を精神の中の現実的な理性であると説明し、そうすることによって、絶対精神と理性の現実性との結びつきを減少させている。統一思想にとっては、神の心情によって明確にされる本来の愛の目的に基づいたロゴスの観点から真理を理解することが死活的に重要である。それ故、倫理の領域は、愛そうとする行動における神の心情の現われであると理解されている。ヘーゲルは、真理の概念のみでなく、自由や倫理的行為の理解に関しても、統一思想と異なっている。ヘーゲルは、倫理の本質は現実化された理性によって規定されると考えているので、倫理的行為の中の主観的自由を強調しているように思われる。主観的精神としての現実化された理性または即自存在が、その固有の自由に対して行動すれば、それは客観的規範または対自存在と対決する。ヘーゲルによれば、そのとき主観的自由は、道徳法則のような客観的規範との弁証法的対立に遭遇する。このように主観的自由が倫理の領域の中で行使される時、暗黙の闘争があることをヘーゲルは認める。他方、統一思想は、ロゴスの概念を、目的、理性、法則を含む内的発展的四位基台をもって説明する。要するにロゴスは、それ自体の中に、理性と法則との間の、すなわち神の心情の願いを實現しようとする共通目的を中心とした自由と倫理規範との間の調和的な相互作用を含んでいる。従って統一思想によれば、倫理の領域内における主観的自由の行使には、いかなる固有の矛盾もなく、人間に対する神の理想の實現に奉仕するというのである。

三 家庭の定義

基礎的な概念や方法論的考慮を検討し終ったので、これからヘーゲルと統一思想の二つの哲学的アプローチにおける家庭の定義の分析に進む、我々の比較研究が二つの思想体系をより良く理解するのに益となるようにして、各々のアプローチのユニークな特徴に関する論点に焦点を当ててやることにする。

(一) ヘーゲルの家庭観

家庭の主要な特徴を分析するに際してヘーゲルは、二つの基本的な論点に焦点を当てているように見える。第一に、彼は、独特の家庭意識の形成における愛の機能について論じる。家族の成員間にあるそのような新しい意識は、家庭関係の弁証法的な根拠から発展するように思われる。第二に、ヘーゲルは、倫理の領域との関係において家庭を定義する。ここで家庭は、精神の発展における一つの明確な契機として現われ、国家に対立するものとしての存在を持つ。ここでは、家庭が愛という変革力によって規定されるといふヘーゲルの理解を提示し、それから、倫理の領域に関する家庭の定義を論じる。最後に、統一思想の家庭観と比較するための準備として検討したことをまとめることにする。

(1) 愛によって仮定されるものとしての家庭

① 家庭関係とヘーゲルの弁証法

「法哲学」の中で、ヘーゲルは簡単な家庭の定義を提示しているので、これをもう少し深く分析することにする。

先ず第一に、ヘーゲルの家庭の定義は、明らかに彼の弁証法の全体的な動きを包含している。ヘーゲルは、家庭内の個人を即自存在として見、さらに進んで、精神を一層規定するものとして愛を前提している。究極的に、ヘーゲルは、家庭を即自対自存在として定義し、個別の精神が愛と和解しつつより高いレベルに発展し、かくして実体的な精神になるとして、次のように述べている。

家庭は、精神の即自の実体として自己体験した統一すなわち愛を、その規定として持っている。このようにして、その性向（または本質）は、この統一されたものの中にある個別性の自己意識から成っており、またそのようなものとして、その本質性は即自対自的に存在する。かくして家庭の中に表わされる精神は、（この性向の中で）それ自体の個人としてではなく、むしろ成員として存在する。(38)

この文章をさらに分析するために、三つの点に焦点をしばることにしよう。第一に、ヘーゲルは、家庭の中に現わされる精神の性向または本質について述べている。この性向に到達するために、ヘーゲルはその異なる契機という点で弁証法的過程を展開せざるをえない。そしてその出発点すなわち即自存在は、個別性の自己意識である。ということ、まず第一に、個人は自らの自我ないし独立を自覚している。しかしながら、自己意識は、家庭の他の個人との対決において現実化する発展の潜在性を担っている。このように個人が家庭の他の成員に没頭している状態は、現実の愛の關係によって表現される。ヘーゲルの見解では、個人は、今やその自我ないしその独立の自覚を、背後に残すことができる立場にいる。かくして、愛自体が規定するカテゴリーとなり、そのようなものとしてそれは個人のための家庭環境を代表する。のみならず、精神の弁証法的発展としては、この家庭環

境は対自存在と見ることが出来る。愛の統一の中で、個人は、その自我を捨てた後、進歩した仕方、すなわち家庭のレベルで、その個性の自己意識を取り戻す。ヘーゲルの理解するところでは、愛の存在論的臨在の故に、個性の新しい自己意識が出現する。最後に、この新しい自己意識は、家庭の本質であって、弁証法的過程の結果として即自対自的に存在する。

上の引用文の中の第二の点は、家族の性向の結果に関することである。すなわち、ヘーゲルは精神の自己意識の即時の結果のことを言っているのである。自己意識は、もはや即自的に、すなわち他の人々のみを自覚した人として存在するのではなく、むしろその反映的な段階を越えて行き、以前の自己のアイデンティティを統合することによって、即自対自的に存在する。ヘーゲルの言葉によれば、自己意識は家庭の一員としての新しい自己のアイデンティティを経験するといふのである。

家庭の定義における第三の論点は、精神の弁証法的発展の継続性を取り扱う。「実体性」(“substantiality”)という用語は、ヘーゲルにおいては、「与えられること」(“givenness”)または「与えられて存在すること」(“given into existence”)を意味する。家庭は精神の独特の特質を構成し、それと共に、それ自身の新しい存在もしくは種類が呼ばれて生じる。すなわち、それが実体的なものとされる。のみならず、この新しい実体の中の家庭も、また直接の実体である。すなわち、それは即自存在として初歩のレベルで自らを現わす。ヘーゲルにとっては、新しいジャンルとしての家庭における精神の現れは、客観的精神の最初の非反映的な出現を構成する。すなわち、

A 即時的または自然的倫理的な精神たる家庭、 B 市民社会、 C 国家としての「その諸契機の形態を通じた運動」(39)における客観的精神の十分な性質をヘーゲルは理解している。ヘーゲルが倫理の領域との関係において家庭を取り扱う時、彼は家庭を市民社会や国家に対して対立的な位置において見ているのであるが、そのこと

については、本論文の後の方でさらに説明することにする。

② 愛の非合理的な面

ヘーゲルは、個々の精神が家庭としての即時的な現われにおいて客観的精神となるための発展上の突破口をもたらずに際して、愛が極めて重要な役割を果たすことを示した。それ故に、ヘーゲルが、「法哲学」の中の先に引用した家庭の定義に続く補完的な注において、愛についてより明白な説明をしているのは驚きではない。そこで、今から愛に関するヘーゲルの言葉を分析することにする。

先に説明したように、ヘーゲルは、愛の最初の示威は個人の自我の屈服ないしは個人の自由または自己の存在自体の否定であり、それによって個人の意識の発展に関連した対自存在を實現するものである、と理解している。言い換えれば、愛は個人をして他人との一体化の意識の中で独立に対するいかなる没入をも放棄させる、というのである。ヘーゲルは次のように述べている。

愛の最初の契機は、私は自分のために独立した人間でありたくないということ、そして、もし自分が独立した人間であるならば、自分には欠陥があり不完全であると感じるということである。第二の契機は、私
が他人の中に自己をかちとるということ、その人が自分の中にあるごとく、自分がその人の中で認められ
るということである。それ故、愛は悟性に対する最も巨大な矛盾であり、それを解決することはできない。
否定され、そして私が肯定した、今なお言われている自己意識のこの堅苦しさほど難しいものはない。し
かし愛は、その矛盾の源泉かつ解決である。解決としては、それは倫理的和合である。(40)

この文章における核心は、未解決の内的弁証法の観点から見た愛の説明である。すなわち、愛の存在論的契機を二つ指摘しているが、この両者は、和解できない反対の立場に立っているように見える。第一に、愛は、私の自己意識をして人間の主要な特徴、すなわち自我および独立、または即自存在を否定するようにさせる。のみならず、私の自己否定は、現実の内的不完全さの経験に基づいている。この意味は、私の自己意識が、即自存在のみによるそれ以上の成長や発展はないという事実をますます自覚するようになる、ということである。発展の行きづまりの自覚とその後の自己否定を、ヘーゲルは他人へ向かうための前提条件と見ている。自分自身を他人に与えることによって、愛の二番目の存在論的契機が起こる。すなわち他人が私にとって意味深いものとなるように、他人の中に私自身の意味を確立することを通して、私は、自分の人間たることを、再び、しかしもっと進歩し成熟したレベルで見いだすのである。この二番目の愛の契機は、ヘーゲルの見るところによると、二人の人間間の愛する関係の結果を描写するのみで、自己意識の現実の変化の発展は説明しない。言い換えると、理解可能な規定された形式主義という点では、愛の二つの契機の間弁証法的相互作用を語ることはできないことをヘーゲルは認める。むしろヘーゲルは、自己意識の発展における質的飛躍を認めなければならないことを、暗黙裡に容認している。かくして、ヘーゲルの見解では、二つの理由で愛は人間の理解には近づきたいままに留まる。第一に、質的飛躍によって、新しい種類の自己意識が愛の体験から出現し、それによって、進化的な、すなわち科学的に理解可能な発展を放棄しなければならない。第二に、結果的な存在論的な愛の契機は、最初の愛の契機に完全に矛盾するものとして、新しい質の自己意識を提示する。ヘーゲルの理解するところでは、自己意識の肯定を獲得するために、自己意識を否定する必要があるというこの逆説が、愛の本質に非合理的な性格を与えている、というのである。(41)

(2) 家庭と倫理の領域

家庭を定義するヘーゲルのアプローチのユニークなところは、一般的な現象から特定の現象へと進み行く彼の演繹法である。すなわち、ヘーゲルはまず共同体と国家について述べ、それから共同体や国家とは対照的な関係にあるものとして、家庭を定義する。この対比を強調するために、ヘーゲルは、共同体や国家については人間の法則を、そして家庭については神の法則を語ることによって、両者には倫理の実体に明白な区別があることを指摘する。一方において、共同体や国家は自らを意識し、人間の法律や習慣の中に表現される現実を構成するが、他方、家庭は共同体や国家の自己を意識した倫理的行動に反対する立場で、現実の普遍性すなわち神の法律を具現する、とヘーゲルは言う。このような人間の法律と神の法律との間の対照的な分裂は、ギリシア思想にその根をもっていることを示すことができる。(42)

神の法則の守護者としての家庭のことを、ヘーゲルは「倫理的領域の単純かつ即時的本質」として暗黙裡に言及し、(43)家庭のこのような基本的概念をさらに次のように文書で説明している。

即時的ないし(単純な)存在のこの要素の中に倫理の領域を表わすこの契機(すなわち、自己意識の契機をその中に含む倫理の領域全般の内的観念ないし一般的可能性)、またはそれ自身の即時の意識であるところのこの契機は、「他者」における本質およびこの特定の自身として、すなわち、自然の倫理共同体として、これが家庭である。(44)

ヘーゲルの家庭の概念のこのような定義の中で目立つのは、即時性(immediacy)のカテゴリーである。家庭は

倫理的秩序の即時的な現われとして、倫理の領域内のいかなる他の反映的段階によっても仲介されない。それは単にそれ自体において基本的な非反映的または自然的組織なのである。ヘーゲルにおけるこの即時性の概念は、家庭が無意識のあるいは内的な観念のレベルで倫理的秩序の中に留まっていることを意味する。のみならず、無意識の存在に関連したこのような家庭の観念は、共同体や国家によって代表される現実の、もしくは自己意識のある存在に対するものと理解しなければならない。言い換えれば、家庭の中で現わされるような精神は、非反映的な段階で自らを見出すのであり、個人的関心や自らの存在に没頭している。しかしながら、精神は自分自身の存在のレベルで反映する潜在的可能性をも担っている。それが現実はこの自己反省に従事する時、ヘーゲルによれば、精神はそれぞれの家庭レベルでの「無意識」の存在を止揚(aufheben)して、共同体の自己意識のレベルへ移動する。このように、家庭と共同体の間の対立の要素は、存在の「無意識」の段階から「自己意識」の段階への移行という観点で理解しなければならない。ヘーゲルが表現したように、「家庭の守護神は普遍的精神に対立して立つ」のである。(45)

「現象学」の中で家庭を定義するのにもう一つ不可欠の部分は、家庭の倫理的性格に関するヘーゲルの理解である。ここにおいて興味深いのは、ヘーゲルが家庭の倫理的側面を定義するに際して、愛の機能を素通りしていることである。ヘーゲルにとって、家庭を倫理的なものとして定義するのは、むしろ個人と家庭の普遍的もしくは神的側面との結びつきの故である。ヘーゲルの見解では、家族の中の死去した成員をたたえるのは、個人の義務である。ヘーゲルは次のように述べている。

……倫理的原理は本質的に普遍的であるが故に、家庭の成員間の倫理的結びつきは、情の結びつきや愛の

関係ではない。倫理的原理は、家庭の個々の成員と家庭全体の関係の中に実体として置かれなければならない。……倫理的行動の内容は、実体的ないしは絶対的かつ普遍的でなければならない。……（この）行為（または行動）は、もはや生きている者ではなく死んだ者に関するものである。(46)

「現象学」のこの文章は、諸関係の交代を指している。ヘーゲルが家庭生活の倫理的側面として定義することは、もはや家庭の個々の成員間の愛する関係ではなく、死者を葬る義務として表現されているような個人と家庭全体との関係である。このように、家庭は、その本質において、それ自体がヘーゲルにとっては完全な神の法律を示す行為たる埋葬の儀式を遵守することによって、絶対精神と結びついているだけである。家庭内における倫理的原理を定義するに際して、埋葬の儀式をこのように奇異なほど強調していることに関しては、ヘーゲルがギリシア思想から受けた影響について別に調べてみる必要がある。(47)

(3) まとめ

ヘーゲルの家庭観を論じることにおいて、我々は家庭意識の弁証法的発展における愛の機能に対して相当の認識がなされているのを見てきた。愛は、その非合理的な側面の故に、それ自身の矛盾性の解決となり、かくして家庭内での倫理的統一の機関となる、とヘーゲルは指摘する。ヘーゲルによれば、このような倫理的統一は、その後の三つの段階に現われる。すなわち、①他の家庭成員たちとの愛の関係を通しての自己意識の成長または変化、②家庭の一員であることの新しい自己意識という点での、ユニークな家庭の独自性を明確にする内的家庭性向の出現、また③客観的精神の最初の弁証法的契機、または即自存在を構成する精神の即時的または非反映的な実体性としての家庭の肯定、という段階である。ヘーゲルは家庭の発展における上述の諸段階の合理的な分析

を、彼の弁証法的アプローチの体系的枠組みの中で提示しようとしているのを我々は発見した。しかしながら、愛の性質の不可解な面を知って、ヘーゲルは自分の弁証法的方法は、科学的なまたは十分に合理的なものではないことを暗黙裡に認めているように見える。

倫理の領域との関連における家庭についての論議から示されたことは、共同体と家庭との間の固有の対立を通じて表わされるような倫理的事体の弁証法的分裂のことを、ヘーゲルが論じているということである。共同体や国家を現実の倫理的事体の場所として受け入れることによって、家庭は共同体から由来しなければならぬとヘーゲルは結論する。事実、ヘーゲルが家庭を即時的、自然的、倫理的共同体と定義したことを我々は論じてきた。この定義の内容を要約するために、三つの点に焦点を当てることにしよう。第一に、客観的精神の自然の現われと同意義である客観的精神の最初の非反映的レベルのことをいう即時性の観念がある。第二に、上述したように、ヘーゲルは家庭をそれ自身の根拠に基づいてではなく、共同体や国家に関して定義する。それ故、家庭は、共同体という現実の自己を意識した存在に対立する無意識の内的な観念として現われる。最後にヘーゲルは、死者をたたえるべき家族の義務を強調することによって、家庭生活の倫理的な性格を定義するが、家庭の成員間の愛の関係は、家庭の倫理的側面を明らかにするにはとるに足らないことのように見える。

ここまで我々は、家庭関係における愛の機能、および倫理の領域にとつての家庭の意義に焦点を当てることによって、ヘーゲルが家庭をどのように理解しているかを分析してきた。ヘーゲルが家庭をどのように扱っているかに関して我々が発見したことが、統一思想の家庭観を論じるための効果的な背景となることが分かる。

(二) 統一思想における家庭観

統一思想によれば、家庭について論じることは、人間の本来の目的および現在の状態を理解するのに中心的な重要性を持つ。すなわち、家庭は、単に存在する世界秩序内の一現象として見られるのみでなく、何よりも神の創造理想の本来の現われであると認識されるのである。前に述べたように、統一思想は、文師が受けた総合的な啓示である統一原理に基づいている。統一原理の教えは、人間は神の救援摂理と協力することを通して墮落した状態を克服して行く復帰の過程にあるという観点から、人間の現状を説明する。(48)このことの意味することは、現代人は二つの対照的な内的性向と対決している自分を見いだすということである。一方において、人間は、神からの疎外、すなわち統一原理によれば、人間の墮落によると説明されている悪の現実を体験する。他方、人間は神から離れているにもかかわらず、自分の中に善が残っていることをともかくも知っている。その理由は、いかなる状況の下でも、人間は依然として神の被造物であり続けるからである。人間は創造主とのつながりを自覚していると言うとき、統一原理は人間の本心について語っているのである。(50)人間には本心があるが故に、自己の目的や運命に対する神の意思を理解することができるといっているのである。

統一思想は、統一原理の中でなされている人間の状態に関する神学的な説明のための哲学的基盤を提供しようとする。特に、統一思想は、人間の墮落した状態の解決を提示する必要性を認識すると同時に、神から与えられた本来の秩序を説明する法則や原理を一層明らかにする任務を引き受ける。言い換えれば、統一思想は、神に對する人間の本来の目的や原理についての理解を深めることによって、人間の苦境を解決するための実質的な貢献をしようとする。それ故、統一思想における家庭を分析するに際して、本来神が意図したような家庭の理想に説明を向けることにする。

家庭を論じるための中心的な論点は、次の二つである。第一に、三大祝福という概念に焦点を当てることによ

って、神の愛を受ける資格ある対象としての家庭とはいかなるものかを探求する。さらに、統一思想の中で提示されているような家庭の理想を把握するためには、愛の關係的側面を検討する必要がある。第二に、そこで見いだすことを家庭の理想の倫理的意味に関連させ、それによっていかにして人類の墮落した状態を克服しうるかという問題に、暗黙裡に答えることにする。最後に、ヘーゲルの家庭観との比較分析をするための準備として、統一思想における家庭について論じたことの要約を呈示するつもりである。

統一思想にとって、神の愛の最高の現われは人間の家庭を通して達成されるということ肯定することが不可欠である。神の創造目的を成就するために、人間は個人として神中心の家庭を築くために自分の潜在的可能性を発達させることになっている。統一思想は倫理に関する章で次のように述べている。

神は人間を愛の対象として造られたが、神の愛は、人間個人を通してではなく、家庭を通して、より完全に現れる。したがって、神の創造理想は、家庭を通じて神の愛を実現するということである。(51)

この文章は、家庭について二つの主要な論点を呈示している。第一に、家庭は神の愛のための資格ある対象として、より大きな概念の中で定義されている。ここで極めて重要なのは、統一思想の三大祝福の概念で表現されている資格ある対象の発展の面である。第二の点は、実際、個々の人間よりも家庭の方が、神の愛をより深く表わすのはなぜかという疑問についてである。これに対する答えは、愛の關係的側面について論じる中で見いだすことができる。先に統一思想の基本的な哲学的概念を紹介したが、これによって、統一思想の家庭観を論じるための十分な土台が与えられていることが分かるであろう。

(1) 三大祝福

統一思想の三大祝福の概念を通して、人間の成長について効果的に述べられているのであるが、この三大祝福の概念は、創世記一章二十八節の「(1)生めよ(Be fruitful)、(2)ふえよ(multiply)、(3)地を従わせよ(subdue it)」にその聖書の根拠を持っている。これらの三つの祝福は、神の創造理想を達成する過程における三つの段階を画するものである。

① 第一祝福

第一に、人間は、神の心情を中心とした独自性のある人格の理想を發展させることによって、個人的レベルで成熟すべきである。その成熟の過程を、統一思想はどのように説明するのであろうか。前に述べたように、いかなる發展過程にも、三つの形而上学的原理がかかわっている。正分合作用の原理は四位基台の時間的観点からの説明であると考えることができるので、我々の分析のためには、授受作用と四位基台に焦点を当てれば十分であろう。(53)

統一思想は、發展的四位基台が形成されるとき、人間の成長が起こると主張する。すなわち、人間の性相と形状、すなわち心と体が目的を中心とした調和ある授受作用をするとき、繁殖体、すなわち個人の成熟が形成される。しかしながら、人間の体は、生物学的機能の観点から見れば、自然の法則に従って自律的に成長する。それ故、人格形成という点での人間成長のユニークな、面は人間の心にある。本性論は人間の心を次のように論じている。

生心と肉心が合性一体化したものが人間の心であるが、生心が主体、肉心が対象の関係にあるときの人間

の心が本心である。肉心が生心に従うということは、価値生活を第一義的に、物質生活を第二義的にするということである。(54)

この文章は、成熟が生心と肉心の調和ある相互作用に基づいていることを確認する。生心は人間の心の性相面を規定し、神の愛の理想を実現するという全体目的に基づく真善美などの精神的価値の追求を担当する。しかしながら、その目的を達成するためには、生心は、統一原理によれば、精神の成長のために必要な生力要素を与える肉体と連結する必要がある。(55)それ故、人間の心には、その形状面として衣食住や生殖など個人としての生存や維持の目的に関連した必要や欲望を表わす肉心が含まれているのである。要するに、生心と肉心がそれぞれ主体と対象の立場で相互作用をするとき、人間の心は、神の愛を実現するための人格形成という点で、成長するというのである。統一思想は、生心と肉心の間の主体・対象関係を維持するための人間の個人的、創造的な努力を肯定することによって、その成長過程の独自性を示している。そのように個人的にかかわりを持つことは、自らの成熟の理想を達成するための人間の責任の成就であると確認することができる。人間の成長を個人の観点から分析してきたが、統一主義の創造理想の見方によれば、いかなる個人の人格形成も、家庭環境の中で起こるものであることを念頭に置いておく必要がある。それ故、最終的分析においては、個人の動機づけは、調和ある家庭生活に依存するということになる。

② 第二祝福

本来の創造理想にとっての家庭の中心的意義は、統一主義の第二祝福の見方の中に表現されている。個人としての成熟に達した後、人間は、家庭生活の中での愛する関係を築くことを通して「繁殖する」(創世記一／二十八)

よう求められる。個人的成熟は、神と個々の人間との間の明確なパートナーシップに基づいた神の縦的な愛の表現である、と説明できるのに対して、第二祝福は、結婚した配偶者間の横的なパートナーシップによってそのような縦的な愛を拡大する。上述したように、統一思想は、原相が人間の心と体を通して最高に現わされる性相と形状の点からのみでなく、夫と妻の理想的なパートナーシップの中に完全に見いだされるところの陽性（男性性相）と陰性（女性性相）という二義的な属性をも肯定する。第一と第二の祝福は、個人の成長の後に、結婚による成長が続くことを意味する。個人が、その成長のために、目的、生心、肉心から成る内的四位基台を形成するのと同じように、夫と妻は、結婚による成長のために、外的四位基台を形成するのであるが、その四位基台は、目的、夫、妻、子供が位置を占める家庭的四位基台になる。家庭の理想を理解するためには、家庭的四位基台の中で中心の位置を占める本来の目的を想起することが必要である。前に述べたように、目的は、愛を通して喜びを實現しようとする神の心情の願望、という観点から定義される。そのような目的が成就されるためには、神の愛の対象である人間もまた、愛を通して喜びを体験することが必要である。統一思想によれば、人間男女は、ひとたび個人的成熟を達成し祝福されて結婚すれば、資格ある神の対象となり、夫と妻として神の愛を体験するようになる。すなわち、結婚のパートナーたちは、お互いに神に対する縦的な愛を拡大することによって、横的な愛の関係を発展させるのである。その結果として、結婚のパートナーシップは、横的な二者一体として説明できるが、実際は神を中心とした三者一体として存在するのである。そのような神中心の結婚の愛は、その次に、子供を通して現われる新しい被造物のための基台となる。(56)統一思想は、家庭の理想を、第二祝福による人間の幸福の達成に関してのみでなく、人間と被造物との関係を説明するための中心的パラダイムとしても見ているのである。

③ 第三祝福

個人の成熟が家庭の理想を樹立するための土台となることを見てきた。同じように、調和ある家庭関係の実現が、第三祝福に従って、人間が被造世界に対して主管するための資格であるように見える。このことは、人間が理想的な家庭生活を通して、さまざまな面の神の愛を実現して初めて、人間は神の愛でもって万物を治めることができるということの意味する。統一思想は、第三祝福における発展の様子を、外的四位基台によって説明する。ここにおいて、目的とは、天国と聖書的概念で表わされるような理想世界を実現したいという神の心情の願いである。さらに、性相の位置は、家庭の理想を実現した人間が占め、万物は形状の位置に割り当てられる。それ故、第二祝福の実体的な達成が、第三祝福の四位基台の中の性相の位置を取り、形状の位置にある万物との授受作用が、万物の目的、すなわち人間による主管を実現する。このように、被造世界における人間の活動を、理想的な家庭関係の延長と考えるならば、人間の成長発展は、第二祝福と、さらには第三祝福を通して説明することができるのである。すなわち、人間は家庭生活から得る神の愛の体験を、万物へと活発に関連させることによって、万物の主管主としての資格を持つようになる。人間が万物の主管を成就すれば、その結果として、神が本来意図したような理想世界がもたらされることになるであろう。

これまで統一思想による神の愛の対象としての家庭の発展相を分析してきた。しかしながら、家庭の理想の意義は、人間の発展の問題に限られるのではなく、愛の概念に関する統一主義の理解をも例示する。

(2) 愛の相関的側面

前に、神の愛は、何ゆえ個々の人間を通してではなく、家庭を通してより深く現わされるのかという疑問を提起した。その答えは、愛の性質に関する統一主義の理解の中にある。統一思想によれば、愛の出発点は、神の心

情であり、愛の本質的な特性は、喜びの実現に向かう指向性であることを見てきた。しかし、喜びは、主体の本質を完全に反映する実体対象があって、初めて十分に実現されるのである。統一思想は次のように述べている。

喜びは対象を愛すると共に生ずるが、対象が主体に似ているときに、主体はより一層、喜びを感じるのである。(57)

この文章は、特に、主体としての神と対象の位置にある人間との間の愛の交流のことをいっているのである。ここにおいて、喜びは相似の法則に基づく愛の存在として定義されるが、この法則とは、主体と対象の間の本質的照応として理解することができる。(58)このことは、対象が主体の性格や形態に似ていればいるほど、主体はより多くの喜びを感じるということを意味する。それ故、主体は、対象が自己に似ていることに刺激されることによって、自分自身の性格や形態をますます自覚して感じる。かくして、授受作用を通して対象が対応することによって、主体はますます自己を自覚するようになり、そこから喜びが発する。ということとは、相互の喜びの経験の中で、対象もまた、より高い程度の自覚に到達するということでもある。しかし指摘しておかねばならないことは、増加した自覚という概念は、自己意識の中の孤立した経験として理解されるのではなく、むしろ主体と対象の現われつつあるパートナーシップの中の他に對する完全な内的指向を意味するものであるということである。このパートナーシップが意味するのは、主体から対象へ向かう愛の衝動は、対象の相似性の故に、主体へ向かって返されるということである。その成就におけるそのような相似性は、喜びという情的状態の中で、対象が一層自分を知らるようになることも含まれる。統一主義の見解では、対象が主体に対して愛を返す能力は、美という情的な

力であると明確に示されている。(59)特に、神が人間の美によって情的に影響されるといふ説明は、統一思想における愛の關係的理解のための存在論的土台となる。言い換えれば、愛は、主体の中の能動的な情的な力として、本質に限られるものではなく、その固有の対象指向性を通して、対象の美の質に応じた対象の反応によって満足を受けるものである。

① 神の愛の対象としての家庭

さて、どのようにして人間が神の愛の資格ある対象となるかを、よりよく理解することができる二つの主要な点を論じることにしよう。第一に、神の心情を十分に表現する神の愛の対象とは、喜びの実現のための最高の相似性を達成するために、愛自体を包含することを指摘しなければならない。このことは、人間が自身自身の中で神の愛を具体化するよう、人間を創造することによって、神はその愛を伝えるのだということの意味する。個人的なレベルにおいて、人間が神にそのように相似していることは、すでに第一祝福を通して説明した。(60)

第二に、先に述べたように、原相内の二つの本質である性相と形状は、人間の心と体や生心と肉心の中に、実体的な現われを見いだす。これらの二性性相はさらに、人間が個人として愛し、神の愛に縦的に応答する能力のための土台を与える。しかしながら、統一思想はまた、原相内には第二の属性である陽性（男性性相）と陰性（女性性相）があり、すべての被造物の性相と形状はこの属性を持っていると説明する。特に、男と女の創造は、性相と形状の面においてのみでなく、陽陰の属性に関しても、原相に十分に相似しているというのである。先に示したように、神の愛の対象としての位置における人間の最高の美は、第二祝福を通して達成される。(61)言い換えれば、家庭の理想を通して神の縦的および横的な愛を実現するということは、愛の相関的側面を最も十分に表現

しているというのである。

愛の性質についての統一主義の見方は、その本来与えられた目的の観点から見るときに、家庭を通して説明することができることを見てきた。家庭は人間生活を包括的に説明するものであるから、家庭から深い倫理的意味を導きだすことをも期待することができる。そこで最後に、倫理の領域における家庭の意義に関する統一思想の立場を論じることとする。

② 倫理の模範としての家庭

統一思想にとっては、倫理は第一義的に、愛の実践に関したものである。(62)前に論じたことから示されたように、統一主義の愛の概念には、常に永遠的秩序における神に対する縦的な愛と、時間的秩序における人間の間での横的な愛という二つの次元が含まれている。さらに、その縦的および横的な愛の最高の実現は、家庭的四位基台を通して説明されている。事実、家庭内における愛の実践は、三つの対象を持つ各位置の相互関係を通して説明される。例えば、神の心情と目的を意味する神の位置は、三つの対象の位置、すなわち、夫、妻、子供に会う。夫は神、妻、子供という三つの対象の位置と関係している。同じように、このパターンは四つの位置すべてについてあてはまり、三対象目的の成就ということを説明する。すなわち、神の愛は、家庭の中での各位置とそれぞれ照応する三つの対象との愛の関係を通して、資格ある対象を見いだすのである。ここで家庭における神の愛の実現は、三種類の愛、すなわち父母の愛、夫婦の愛、子女の愛という分性的な愛の中に現われる。これが意味することは、分性的な愛は方向性を持った愛であるということである。すなわち、父母の愛は父母から子供への縦的な愛であり、子女の愛は子供から父母への縦的な愛であり、夫婦の愛は夫と妻の間の横的な愛である。(63)統一思想にとって、倫理の目標は、これらの分性的な愛の実現であり、それによって家庭的四位基台の完成に至るとする。さ

らに、統一倫理論は、家庭的四位基台の各位置は、三対象目的を実現することによって全体目的と個体目的を達成することに向けられていることを強調する。⁽⁶⁴⁾ 言い換えれば、神の心情から出てくる目的の概念は、一方において理想社会実現の目標をもって、社会と国家において神中心の愛の関係を推進することを含み、また、他方において、家庭の理想を維持する範囲内において、個人の欲望の充足を保証するのである。普遍的目的と個人の形成との間の本質的結びつきについても、倫理と道徳の關係に関する統一主義の理解の中で表現されている。前に説明したように、理想的な家庭を築くための土台は、第一祝福の成就である。個人の授受は、内的四位基台（目的、生心、肉心）を通じた人間の心の発展によってなされ、家庭關係の形成は、外的四位基台（目的および家庭の成員）に基づいていることを見てきた。第一祝福の達成が第二祝福を成就するための前提であるのと同じく、道徳として理解される個人的人間行為の規範が、倫理という家庭内における人間行為の土台となる。統一思想はまた、道徳は個人的成熟の徳目を含む主観的な規範であるのに対して、倫理は家庭生活において形成される徳目を含む客観的な規範である、とも述べている。⁽⁶⁵⁾ 要するに、倫理とは、道徳的に責任を持つ個人が、家庭的四位基台を通して定義される本来の計画に従って行う明確な相互作用を意味するのである。

統一倫理論の一つの傑出している点は、家庭倫理を社会倫理に適用していることである。事実、家庭倫理をどのようにに社会に拡大することは、先に述べたように、道徳を倫理の前提とみなすことと首尾一貫しているように思われる。言い換えれば、個人の人間行為が、家庭關係の規範のための土台として機能するのと同じように、家庭における人間行為の規範としての倫理が、社会倫理のための規範になるというのである。第一祝福の達成が第二祝福の実現に奉仕するのと同じように、第二祝福の成就是、第三祝福を達成するための前提となるということもできる。しかしながら、こうした概念上の考察において重要な点は、家庭關係が、第一祝福によって開始され

る個体目的と、第三祝福を達成するという点での全体目的を成就するための基本的パターンを与えると、統一思想が主張していることである。家庭は神の愛の資格ある対象であるとされるが故に、個人の成熟および理想世界の建設という両方の目標とも、関連しており、それは家庭を完成することへ向かう本質的な方向性に基づいているように思われる。このように、統一思想は、家庭内での個性の形成、および社会や国家などのあらゆるレベルの社会的相互作用のために、家庭倫理が模範的に機能することを意味しているのである。

③ まとめ

統一思想における家庭について我々が取り扱ってきたことは、主に四つの論点にまとめることができる。

第一に、統一思想は、家庭の生活の土台や哲学的意味を、本来の創造された秩序の観点から説明しようとしている。現代の家庭生活を取り巻く混乱した状態を十分に認識しつつ、統一思想は、神によって意図された家庭の理想を分析する必要性を肯定する。かくして統一思想は、現代の男女関係の退廃を克服するためのみならず、調和ある世界のための有効な青写真を提供するためにも、人間の相互作用における必要な変化を導くための理論的枠組みを与えようとするのである。

第二に、統一思想によって、家庭は神の愛を受ける資格のある対象であると定義されることを我々は発見した。ここにおいて、現在の家庭が意図された理想から逸脱しているために、命令する原理としての超越した目的の中心性が機能するのである。そのような家庭の理想の発展相は、三大祝福を通して説明される。個人の成長の後に、結婚し親となることによる成長が続き、それはさらに万物の主管主として資格ある者となるための目標を持つ。成長過程には発展的四位基台が関係し、それが目標を中心とした進歩を確かなものとするということを見てきた。独自性のある個人として、または調和ある家庭として、いかにして明確なアイデンティティを維持するかという

問いは、自同的四位基台内の授受作用を通してダイナミックに答えられている。

第三に、家庭の超越的な目的の意味は、愛の相関的側面についての統一思想の観念を学ぶときに明確になることを見てきた。統一思想によると、喜びを実現する全般的な目的は、主体と対象の相似に基づく愛の存在を通して達成される。喜びが実現するために、対象の側に一定の特質を要求するのが相似の法則であることを強調してきた。対象のそのような必要な特質は、受けた愛に対して、逆に返す情的な力としての美の定義へと導く。その後、家庭が神の前に最高の美の特質を獲得するときに、神の愛を受ける資格のある対象として現われる。神の縦のおよび横的な愛が家庭の理想の中で表現されるならば、そのような美が実現される。それゆえ、愛の相関的側面は、愛と美の絶え間ない交換の中で現わされるのであり、このことが実際、統一主義の授受作用と四位基台の概念によって示される相関的な存在様相を確認させるのである。

最後の点は、家庭を通じた倫理の領域の定義に関することである。統一倫理論は愛の実践を強調するから、人間関係を規定する主要な種類の愛を一層明らかにすることが不可欠である。ここに、家庭は、父母の愛、子女の愛、夫婦の愛として、神の愛を表現するための模範として現われる。家庭倫理という模範が全体目的および個体目的に適用されるとき、統一倫理論の独特な点が明瞭になる。特に、家庭倫理を社会倫理に適用することは、社会や国家における家庭の役割に新しい光を当てるものである。

四 結論

ヘーゲルと統一思想における家庭の哲学的基礎に関する我々の分析は、その本来の意図、すなわち二つの思想

体系の独特な特徴を示すという時点で到達した。これまで述べてきた比較対照に従って、ヘーゲルと統一思想による家庭の理解における重要な特徴を評価しつつ進むことにする。すなわち、三つの中心的な点、(一)家庭の形成についての基本的見方、(二)愛の理解、(三)倫理の領域にとつての家庭の意義、についてである。これら三つの各々は、比較分析のために用いることのできる相当な数の論点を提起するものであるから、簡潔にするために、三つの重要な点に論議を制限する必要がある。

(一) 家庭形成における基本的見解

第一の点は、家庭の形成における基本的な見方ないし独特な特徴についてである。ヘーゲルと統一思想の両方とも、愛を家庭生活の形成における規定要因と見ている。ヘーゲルは、愛が精神を規定するものとして、愛について語っている。ヘーゲルは、その弁証法的アプローチに従って、個人の自己意識(即自存在)を家庭の他の成員たちの意識(対自存在)と対決させることによって、家庭の発展を説明する。(66)愛の力は、もともとの自己意識を、家庭の成員であるという新しい自己意識へと変化させ、それによって弁証法的過程の目標(即自対自存在)を実現する、というのである。その新しい自己意識は、もはやそれ自体では存在せず、愛するという経験を通して、その反映的な段階を背後に残し、以前の自我と独立の本質を、新しい家庭の成員としての意識の中へ統合するようになる。ヘーゲルは指摘する。ヘーゲルは、家庭の形成を第一義的には新しい自己意識の出現、または家庭の中で成員となるという点で、個性の変化として見ている、と論じることができる。

統一思想は家庭の形成について全く異なった説明をする。ヘーゲルが、理性の即時的手段としての自己意識に焦点を当てることによって、家庭を合理的に分析される一つの現象として取り扱っているのに対し、統一思想は、

家庭の理想を理解する必要性を強調する点で、ヘーゲルのアプローチとは対照的である。(67)すなわち、統一思想の見解では、家庭についてその現状を知的に知るだけでは十分でなく、むしろ本来意図された被造秩序と一致する目的を通して明確にされる、家庭の情的な根拠を理解することがより重要だというのである。かくして統一思想では、家庭は神の愛の資格ある対象であると定義され、神の愛を実現するというその目的が、三大祝福に示される形成過程を貫いているのである。(68)ここにおいて、愛を通しての喜びの実現が、家庭の発展のための最終目標となる。家庭の発展とは家庭の成員としての新しい自己意識が形成され、その形成のための愛がその変革の力を与えるというヘーゲルの概念ではなく、統一思想が肯定するように、さまざまな自己意識の段階を用いる家庭的四位基台を通した愛の実現なのである。自己意識を発展させるために愛が存在するのではなく、愛のために自己意識の形成が存在するのである。目的中心の統一思想のアプローチは、ここにおいて理想的なヘーゲルの体系とは対照的である。

(二) 愛の理解及び相関的存在様相

ヘーゲルと統一思想の間の不一致は、これら二つの哲学的アプローチにおいて、愛をどのように理解しているかを検討するとき例示される。ヘーゲルは、弁証法的に相互作用をすることになっている二つの存在論的契機を区別することによって、愛を説明しようとする。(69)愛の最初の契機は、自我と独立という人間としての主要な特徴を否定することから成る。ヘーゲルの用語を用いれば、即自存在がその個別性を放棄し、それによって対自存在、すなわち他との統一の意識を達成する。自己否定のこの第一歩は、不完全さを知ることから生じ、この自覚によって、ヘーゲルによれば、即自存在の段階にとどまっていることによっては何ら成長がないことを、自己意識の

中で知るに至る、というのである。

愛の第二の契機とは、他人の中に自分の意味を確立したり、反対に自分にとって他人が意味深くなったりすることによって、他人の方へ向かうことを特徴とする。しかしながら、ヘーゲルは、これら二つの愛の契機が何ら明確な弁証法的相互作用を示すものでないことを認める。自己意識の発展において、弁証法的に説明できない質的飛躍に理性が単に出会うにはすぎないのである。

統一思想は、愛は一定の自己否定に至るまで、完全に自己を与えることから始まる、というヘーゲルの主張には同意する。授受作用の原理における与えることの第一義性がこの点を支持する、と論じることができる。さらに、人間は他人から孤立しては自己の人格を発展させることができないことから示されるように、自己意識には不完全なところがあることをヘーゲルは認めているが、これは、人間が神と他の人々のために創造されているという統一思想の見解を指すものである。しかしながら、ヘーゲルは、そのような不完全さの内的体験をさらに分析することはしていない。これに対して、統一思想は、愛の概念を展開するにあたって、自己の不完全さと、他人のために愛するという、本質的に内的な方向性を認めることから始めているように思われる。すなわち、愛は、その本質において相関的なものであり、対象に対する主体の情的な力であると説明することができ、美を通じた対象の対応は、対象から主体へ向かう情的な力であると定義される、と統一思想は主張する。(70)統一思想の見解では、愛は神の心情から発し、喜びの実現の方向に向けられており、そのため愛には常に目的と方向性が与えられているのである。上に述べたように、ヘーゲルは、愛が人間の理性には近づきにくいままに存在することを認めている。対照的に統一思想は、理性は愛の中にその存在論的根拠を持つことを意味している。のみならず、個人の自己意識の中で愛が合一的な経験をするというヘーゲルの概念は、神と人間の間および人間と人間の間におけ

る現実のパートナーシップの中で表現され、主体と対象の間の愛と美の相互作用によって確認されるところの愛の相関的本質という統一思想の概念によって、取って代わられるのである。

最後の一つは、統一思想の神の心情の理解、およびそれに続く愛と喜びの関係の定義の中に基礎をおいた、被造世界すべての相関的な存在様相に関する点である。言い換えれば、統一思想は、発展的四位基台と自同的四位基台という独特な概念を展開するのであるが、この概念は、成長や変化の現象にとつてのみならず、存在するものの普遍的側面に対しても関係ある定義を与えるのである。絶対精神の合理的現われとしての自己意識の諸段階についてのヘーゲルの弁証法的な理解では、弁証法的過程の最後における一層の発展については、説明していないように思われる。この意味することは、ひとたび絶対精神が理性国家を通して十分に実現されれば、その結果としての合理的な自己の見方からは、完了の段階におけるそれ以上の発展は除外されるように思われる、ということである。他方、統一思想は、完了の段階として、創造理想のための自己同一と発展の両方を肯定する。つまり、統一思想は、創造された秩序が徹底的に相関的な存在様相を呈していると説明することによって、ヘーゲルの理性的に実在をとらえる見方に取って代わるのである。

(三) 倫理の領域に関する家庭の理解

第三番目の論点は、倫理の領域との関係における家庭の理解を取り扱う。ヘーゲルは家庭を無意識的ないし内的な観念のレベルにおける非反映的、または自然的組織として定義する。(71)それと同時に、家庭は倫理の領域の即時的本質である。ヘーゲルにおいては、即時性の概念および非反映的または無意識的なレベルの存在という概念は、彼の弁証法的な家庭の定義から出てくる。すなわち、新しい自己意識が出現するとき、それは家庭内の成員

の意識として、新しい非反映的段階において即自対自的に存在する。さらに、この新しい家庭の自己意識は、客観的精神の最初の非反映的出現として、すなわちそれ自身の即自存在として、独特な性質の形成をも行うとヘーゲルは肯定する。ヘーゲルによれば、客観的精神は、家庭、市民社会、国家としての弁証法的契機の形態を通して自らを現わす。その後で、ヘーゲルは、無意識のないし内的な観念を、定義される家庭のレベルを、共同体ないし国家の自己意識的レベルと比較対照する。このような思考の線に沿って、ヘーゲルは、国家を現わす人間の法律と、家庭という倫理の分野を定義する法律との間に、倫理的事實的な分裂があることを肯定する。

倫理の領域に関するヘーゲルの家庭の理解は、いくつかの点で統一思想とは対照的である。とりわけ、統一倫理論は、家庭の理想に基づく人間行為のための首尾一貫した客観的規範を提示する。ここにおいて、倫理は愛の実践であると定義され、さまざまな種類の愛が、家庭的四位基台内の諸関係から派生してくる。(72)神の心情の表現としての目的が、家庭的四位基台の中心であるので、三種類の分析的な愛は、常に方向性をもった愛であると理解される。のみならず、目的には全体目的と個体目的があり、これによって家庭倫理を社会や国家に適用するための継続性が与えられる。これは、統一思想によれば、社会は家庭の直接の拡大であることを意味し、このことが国家のための倫理の土台とならしめるのである。

ヘーゲルにおいては、家庭が国家と直接的に対立するものとして理解されているのを、我々は見てきた。他方、統一思想は家庭を総合的な倫理の模範として理解しており、ここには国家も含まれるのである。さらに、統一倫理論は、人間の法律と神の法律という競争的な秩序によって表現されているような、理性と愛の間の固有の対立を肯定するヘーゲルの見方を排斥する。むしろ統一思想の見方は、神の愛を人間の理性の土台として確認することによって、人間の法律と神の法律の間に本質的な調和があることを意味する。

最後の分析として、ヘーゲルが提示しているような家庭の理性的な理解は、愛を理性の下位に置くものであるために、愛の本質を説明できず、したがって不十分であるといえることができる。統一思想は、家庭の理想を説明するための目的中心のアプローチによって、有効な代案を提示しているように思われる。これによって家庭は、個人的成熟に向かう人間の発展のための基準となるのみでなく、あらゆるレベルの人間社会のための倫理の模範として役立つものとなるのである。

註

- (1) Rudolf J. Siebert, *Hegels Concept of Marriage and Family, The Origin of Subjective Freedom*, (Washington D. C.: University Press of America, 1979) p. III.
- (2) G. W. F. Hegel, *Phinomenology of Spirit*, transl. by A. V. Miller, (Oxford:Oxford University Press, 1977). Henceforth cited as *Phenomenology*.
- (3) G. W. F. Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts*, in *Samtliche Werke: Jubiläumsausgabe* in 20 Banden, Hermann Glockner, Ed., (Stuttgart: Frommann, 1964), Vol. 7. Henceforth cited as *Philosophy of Right*.
- (4) *Explaining Unification Thought*, (New York: Unification Thought Institute, 1981). Henceforth cited as *EUT*.
- (5) *Fundamentals of Unification Thought*, (Unpublished manuscript, Unification Thought Institute, 1989). Henceforth cited as *FUT*.

- (6) Phenomenology, p. 265, # 440.
- (7) Ibid. # 442, p. 265.
- (8) Ibid. # 447, p. 267.
- (9) Ibid、# 四四四、二六六頁へ「ゲルによる「実体」という用語の使用が、「他の何ものからも独立して存在するもの」とか、「それ自体の中で独立して存在する本質」として考えるアリストテレスの実体のカテゴリーとどうかち替えていこうか註文が打田から来た。」
- (10) Ibid.
- (11) William S. Sahakian, History of Philosophy, (New York: Barnes & Noble, 1968), p. 190
- (12) Macbride Sterrett, The Ethics of Hegel, (Boston: Ginn, 1893), p. 58.
- (13) Howard P. Kainz, Hegels Philosophy of Right with Marx's Commentary: a Handbook for Students, (The Hague: Nijoff, 1974), p. 8.
- (14) Walter Kufmann, Hegel: A Reinterpretation, (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1965), p. 154.
- (15) For this quote I am indebted to Kaufmann who lists as reference: G. W. F. Hegel; *Samtliche Werke: Jubiläumsausgabe* in 20 Bänden, ed. Hermann Glockner, (Stuttgart: Frommann, 1927-30. Vol. 19), p. 610.
- (16) Kaufmann, p. 156.
- (17) Ibid., p. 161.

(18) 「統一思想概要」 日本語版、一九八九、三八〜三九頁

(19) 対照的に神の擬人化の比喩的な使用は、「園の中に主なる神の歩まれる音を聞いた」(創世紀三・八)というような明白な物理的イメージを意味する表現に適用される。このような比喩的な使用は極めて限られており、神の属性を論じることに関して我々の神の理解を勧めるものではない。筆者による未出版の論文「統一主義における神の愛」(The Love of God in Unificationism, Barrytown, N. Y.: Unification Theological Seminary, 1989, p. 3 以後LGUとして引用)を参照。

(20) 「統一思想概要」、四二〜四三頁

(21) 韓国語の「性相」と「形状」という用語には、満足すべき英語の訳語がない。「性相」とは、一般的に、存在するものの心や本能などのような、目に見えない内的、機能的な側面を意味し、「形状」とは、体や形や構造などのような、目に見える外的、物質的な側面のことをいう。(「統一原理」を参照のこと)

(22) 統一思想は、神相に関しては、原相の中に性相と形状の合性体または中和体が含まれると考えることの重要性を強調する。この見方によれば、性相と形状の相互関係の意味を理解すれば、神についての正確な説明をすることができるという。難点は、性相と形状の相互関係を完全に一つとなった合性体として肯定することにある。実在に関する西洋の経験では、一般的に精神的、抽象的な領域と物的、現実的存在との間に概念上の分裂を認めているからである。しかし、統一思想は、性相と形状によって代表される内容と形式、心的側面と物的側面は、それらの共通の究極原因の観点から見ると、同じ性質を持った本質でなければならぬと主張する。性相と形状との間の相違は、ただ主体と対象の位置を通して現わされるような相対的な違いのみである。(「統一思想概要」 二二〜三二頁、参照)

- (23) 「統一思想概要」 三二～三五頁
英文原稿のまま
- (24) 「統一思想概要」 四三～四四頁
- (25) M. Darrol Bayant and Herbert W. Richardson, Eds., A Time for Consideration, (New York: dwinnellen, 1978), p. 302.
- (26) 「統一思想概要」 五一～五二頁
- (27) 同上 五一～五六頁
- (28) 同上 五七～五八頁
- (29) 同上 五二～五三頁
- (30) 同上 五六頁
- (31) 同上 四五頁
- (32) 同上 五二～五六頁
- (33) 同上 四五～四六頁
- (34) 統一思想は「創造の二段構造」について述べている。
「統一思想概要」 五四～五五頁
- (35) 神の形状は、すべての被造物の物質的側面の原因となる。その物質にはエネルギーが含まれる。なぜなら、物質の法則によれば、エネルギーは物質の本質であると見なすことができるからである。神の形状とは、物質的エネルギーを創造するための無限の可能性を意味する。かくして、それは「前エネルギー」または「前

- 物質」と呼ぶことができる。(「統一思想概説」二六～二八頁)
- (37) 「統一思想概説」 一三八～一四〇頁
- (38) Philosophie des Rechts, # 158, p. 237
- (39) Ibid. # 157, pp. 236-237.
- (40) Ibid. # 158, pp. 237, 238. The Translation follows Largely Machride Sterrett's version. See Sterrett, p. 138.
- (41) 愛は、悟性の機能を超えて行き、神秘的な内容を含むというヘーゲルの説明は、ドイツ語の原文によく示されている。
- (42) 国家と家庭、もしくは人間の法律と神の法律との間の対立的な関係をヘーゲルが肯定したのは、ソフォクレスの演劇「アンティゴネ」の影響を受けたからであると論じることができる。
- (43) Phenomenology, # 449, p. 268.
- (44) Ibid. # 450.
- (45) Ibid.
- (46) Ibid., # 451, p. 269-270.
- (47) 注四一を参照のこと。アンティゴネがその兄の埋葬式を行なう際の英雄的な行為を取り上げることによって、ソフォクレスはそれを家庭生活の倫理的側面と宗教的側面がまさに一致する行為として選んだように見える。そのとき、神の法律が家庭の法律になるのである。
- (48) Divine Principle, p. 170.

- (49) Ibid., p. 65ff.
- (50) Ibid., p. 64.
- (51) 「統一思想概要」 二五八頁
英文原稿のまま
- (52) 「統一思想概説」 五七頁
- (53) 同上 一二四〜一二五頁
- (54) Divine Principle, p. 60
- (55) LGU 二六〜二七頁
- (56) 「統一思想概説」 三九頁
- (57) この部分は主に、著者が書いた「統一主義における神の愛」という論文に従っている。LGU、八〜九頁を参照。
- (58) 「統一思想概要」 二五八頁
- (59) 本論文の二(2) ①を参照。
- (60) Ibid.
- (61) 「統一思想概要」 二五八頁
- (62) 同上 二五八頁
- (63) 同上 二五九頁
- (64) 統一思想では、道徳の得目として、純真、正直、勇氣、克己などをあげている。倫理の徳目としては、慈
- (65)

(72)(71)(70)(69)(68)(67)(66)

愛、孝誠、忠義などがある。「統一思想概要」 二六二頁参照。
本論文の二(一) (1) ①を参照。
同上 二(一) (1) ①を参照。
同上 二(一) (1) ①を参照。
同上 二(一) (1) ②を参照。
同上 二(一) (1) ②を参照。
同上 二(一) (2) ②を参照。
同上 二(一) (2) ②を参照。